

<ne pas être probable> をめぐって

藤巻香代

0. 序論

ある事態の蓋然性が中程度に高いことを伝えようとするとき、発話者はしばしば *probable* を用いた発話を構築する。この形容詞の否定を含む文 <il n'est pas probable que P> の用例は存在するが、使用頻度が低いことは藤巻(1998)で述べたとおりである。たとえば、文脈なしで「工事が10月までに終わる蓋然性が低いこと」を表す場合、インフォーマントは 1b), 1c) は適切であるが、1a) は適切でないと答える。

1a) ??Il n'est pas probable que les travaux finiront / finissent avant octobre.

1b) Il est peu probable que les travaux finissent avant octobre.

1c) Il est improbable que les travaux finissent avant octobre.

本稿では、le probable(蓋然性が中程度に高いこと)を打ち消している <il n'est pas probable que P> を中心に¹、*probable* の否定の使用頻度が低い理由を明らかにし(1章)、また、使用が可能になる条件をさぐってみたい(2章)。

1. *probable* の否定の使用頻度が低い理由

ここでは、*probable* を否定した場合の référent を確認し(1.1.)、次いである内容を否定文で表すことの意味について考え(1.2.)、情報の訂正という点から *possible*, *certain* の否定と比較する(1.3.)、という手順で *probable* の否定が用いられにくい

理由を考察していく。

1.1. *probable* を否定したときの *réfèrent*

probable を否定すると *réfèrent* はどうなるのかという点について、論理的に2つの解釈が考えられるだろう。1つ目は、*probable* が単独で、あるいは副詞などの修飾語を伴って指しうる蓋然性の領域(0%より大きく 100%より小さい)に事態 P が位置づけられることを打ち消す、「蓋然性ゼロ」の解釈である。2つ目は、*le probable* を打ち消して *abaissement* により低い蓋然性を表す解釈である。ところで *probable* は程度副詞と共に起する (*très probable, plus probable, peu probable*)。 *le probable* は *le grand* などと同様に段階のある概念(大きさ、蓋然性)のプラス極寄りに位置し、自分自身も段階をもつ。 *grand* を否定すると、大きさの段階が下がるだけで大きさがなくなることはない。同じように、*probable* を否定したときも蓋然性の段階が下がるだけで「蓋然性ゼロ」を指すことはないと考えるのが妥当であろう。「蓋然性ゼロ」を指すのは *possible* を否定した場合である。段階を持たず、反意概念と二項対立を成す *le possible* は否定すると、その概念の領域外である「蓋然性ゼロ」を指す。ところが、段階をもつ *le probable* は二項対立の一方にはならないので、否定すると蓋然性の概念のマイナス極寄りを指す。2)のような発話が論理的に可能であることもこの解釈を支持する。

2) *Ce n'est pas probable. Pour autant, ce n'est pas impossible.*

よって、*probable* の否定は、低い蓋然性を表すとわれわれは考える。また、P の成立の蓋然性が低いということは、 $\neg P$ の成立の蓋然性が高いことであるから、*<il est probable que $\neg P$ >* という言い方も可能である。Attal (1994) は *<ne pas être probable que P>* と *<être probable que $\neg P$ >* は概ね同じ内容を表し、互いに書き換えができるが、それでも *<ne pas croire que P>* と *<croire que $\neg P$ >* の書き換えほど自由ではないと指摘している²。

3a) ??Il n'est pas probable que les travaux finissent avant octobre.

3b) Il est probable que les travaux ne finiront pas avant octobre.

1.2. 肯定文 vs 否定文

grand / petit のような段階のある概念を表す形容詞の反意語のペアのうち、概念のスケール上のプラス極寄りを指す方を否定するときを考えてみよう。たとえば、Pierre が体の小さい方に属することを表そうとすると、次のような2つの発話が考えられる。

4a) Pierre est petit. (Kleiber :1976)

4b) Pierre n'est pas grand. (ibid.)

4b) が *Pierre n'est ni grand ni petit*. の解釈も可能であることを除いて、4a)と4b)の解釈は概ね同じといえるが、4a)の発話は、発話者が *le petit* を想起し、その規準 (norme)³を Pierre が満たすと判断してできたものである。他方、4b)の発話は、発話者が *le grand* をまず想起して、その規準に Pierre が達しないと判断し、*le grand* を打ち消してできたものである。このように、我々が否定文を発するとき、打ち消されている語句の表す概念が発話者の意識にのぼっている⁴。

ところで、ある事態の蓋然性が低いことを述べようとするとき、*probable* の否定を用いた発話と、*probable* の反意語 *improbable* を用いた発話が考えられる。

5a) Il est improbable que les travaux finissent avant octobre.

5b) ??Il n'est pas probable que les travaux finissent avant octobre.

5b)では *le probable* が発話者の意識にのぼっているわけであるが、*improbable* を用いる肯定文に比べ、*probable* の否定文の容認度が低いことから、*le probable* を想起してから打ち消すことに問題があると考えられる。

Le probable の規準を満たしていることを打ち消すことで低い蓋然性を表すことにどのような問題があるのだろうか。*probable* の表す蓋然性は非常に高いわけではない。－P よりも P にかたむいているという程度で、蓋然性が中程度に高いことを表す。このような中途半端な高さの規準を満たしていることを打ち消しても、中途半端な訂正結果しか生み出さないのではないだろうか。ここでいう中途半端な訂正結

果というのは、P の成立が排除されないということではない。*improbable* も *certain* の否定も P の成立を排除してはいないが使用頻度は高い。否定の発話によって行われる情報の訂正の前と後で内容の差があまりないという意味において、訂正結果が中途半端なのである。Nølke(1993)が述べているように、*ne... pas* による否定は基本的に *négation polémique* (acte de refus としての否定) であるという立場に立つならば⁵、第一発話の無効化が否定文を用いる目的である。そしてその第一発話の無効化を通して発話者は相手の情報(考え)の訂正をしている。そう考えると、情報の訂正力に欠ける否定文は発される理由がないように思われる⁶。事態の蓋然性が低いことは肯定文でも述べることができるのだから、訂正力に欠ける〈ne pas être probable〉を用いてまで否定文という有標なたちをとる理由がないのだろう。

1.3. *possible*, *certain* の否定との対照

probable の否定は情報の訂正力に欠けると述べたが、具体的に事態の成立に関する訂正にはどのようなものがあるのだろうか。ここで、認識的モダリティを表す他の形容詞 *possible*, *certain* の否定と *probable* の否定を、情報の訂正という点から比較検討してみよう。

6) Il n'est pas possible que les travaux finissent avant octobre.

7) Il n'est pas certain que les travaux finissent avant octobre.

8) Il n'est pas probable que les travaux finissent avant octobre.

le *possible* は P の成立を排除しない。le *possible* を打ち消すと P の成立が排除される。le *certain* は $\neg P$ の成立を排除する。le *certain* を打ち消すと P の成立は排除されない。le *probable* は $\neg P$ の成立を排除しない。le *probable* を打ち消しても P の成立は排除されない。これらをまとめると以下のようになる。

[NEG(*possible*)]P : non exclusion de P \rightarrow exclusion de P

[NEG(*certain*)]P : exclusion de $\neg P \rightarrow$ non exclusion de $\neg P$

[NEG(*probable*)]P : non exclusion de $\neg P \rightarrow$ non exclusion de P

possible と *certain* を否定すると、non exclusion \leftrightarrow exclusion の訂正が行われ

る。これは事態の成立・不成立に関する情報として価値がある。ゆえに *possible* と *certain* は否定する意義があるといえる。他方、*probable* の否定が行う *non exclusion* → *non exclusion* の訂正は、事態の成立・不成立に関する情報としてあまり価値がない。ゆえに *probable* を否定する意義があまりない。これが *probable* の否定の使用頻度が低い理由だと思われる。

そこで *même, du tout* などを加えて訂正力を補うと容認度が上がる。

9a) ??Il n'est pas probable que les travaux finissent avant la fin de l'année.

9b) Il n'est même pas probable que les travaux finissent avant la fin de l'année.

10a) ??En tout cas le souvenir de Rachel ne jouait plus à cet égard qu'un rôle esthétique. Et même avant, il n'est pas probable qu'il eût pu en jouer d'autres.

10b) En tout cas le souvenir de Rachel ne jouait plus à cet égard qu'un rôle esthétique. Il n'est même pas probable qu'il eût pu en jouer d'autres. (Proust, M. : *La Recherche : La Fugitive* (2))

11a) Profane : Il est probable que les prix de la terre baisseront encore. Spécialiste : ?? Non, ce n'est pas probable; compte tenu des indices économiques, ils vont remonter bientôt.

11b) Spécialiste : Non, ce n'est pas probable du tout; compte tenu des indices économiques, ils vont remonter bientôt.

また、成立の蓋然性が低い事態と高い事態を対照的に並べると、〈il n'est pas probable que P〉の容認度が上がるようだ。

12a) ?? Il n'est pas probable qu' il ait voulu mentir.

12b) Il n'est pas probable qu' il ait voulu mentir mais il est probable qu'il ne savait pas la vérité.

13a) (工事中の図書館と建物について) ?? Dans cet état de choses, il n'est

pas probable qu'on puisse utiliser la bibliothèque en octobre.

- 13b) Dans cet état de choses, il n'est pas probable qu'on puisse utiliser la bibliothèque en octobre, mais il est probable qu'on pourra utiliser le bâtiment en octobre.

P の成立・不成立について情報の訂正力に欠ける *probable* の否定文を発話者は理由がない限り発しないが、理由があれば用いるはずである。その理由を 2 章で考察していく。

2. <il n'est pas probable que p> が使用される状況

Martin(1983 :122)は、*probable* を否定した場合に従属節のとり動詞叙法を以下のようにまとめている。

14a) NEG [probable(P)] → 直説法

14b) [NEG(probable)] P → 接続法

improbable は *le probable* に否定がおよぶが、*ne pas être probable* の場合は必ずしもそうではなく、[P – être probable]全体に否定がおよぶことがある。そしてこれが、*improbable* が *ne pas être probable* よりも接続法をとりやすい理由であると Martin (1983)は指摘している。以下では[NEG(probable)]P の構造をもつ *probable* の否定が用いられる状況を検討していく。

P の成立を信じている相手に P の成立の排除を告げる場合を考えてみよう。P の成立を信じている相手に対し、はっきりと P の成立を排除するのは断定的で反論の色が濃い。「P の成立」→「P の成立の排除」という訂正を通して相手に反論することになりうるからである。訂正力が大きいほど反論の色が濃くなる恐れがある。反対に、訂正力が小さければ反論の色は薄いと考えられる。反論の色を薄めるために訂正力を減らしたいとき、発話者は *probable* の否定を用いることがある。

15)は <cela n'est pas probable> の例であるが、Mme De Villefort は伯爵の言葉にはっきりと反論しないように配慮して「以前どこかで会っていること」の不成立を述べるために、訂正力に欠ける *probable* の否定を用いている。<cela n'est pas

probable>後の文にも、断定的な否定を避ける言葉づかいがみられると考えられる (*aime très peu, sortons rarement*)⁷。

15) –Mme De Villefort et Valentine, est-ce que je n'ai pas déjà eu

l'honneur de vous voir quelque part, vous et mademoiselle? Tout à l'heure j'y songeais déjà; et quand mademoiselle est entrée, sa vue a été une lueur de plus jetée sur un souvenir confus. (略)

–Cela n'est pas probable, monsieur; Mlle De Villefort aime très peu le monde et nous sortons rarement, dit la jeune femme.

(Dumas, A., *Le Comte de Monte-Cristo*)

他方、16) のように姉妹間で、P の成立を信じている相手に対して断定的に P の成立を排除するのに配慮を必要としない場合、*probable* の否定の容認度は極めて低い。

16) Sœur cadette: Je vais en parler à maman et me faire offrir cette robe.

Sœur aînée: ?? Mais il n'est pas probable qu'elle te l'achète. Elle vient de t'offrir une jolie montre pour ton anniversaire!

また、発話者が打ち消そうとする P の成立が、相手の信じているものではない時、つまり、何もないところに P の成立の蓋然性が低いということを述べる場合にも *probable* の否定が用いられることがある。例えば P の不成立を相手に伝えにくいので、はっきりと P の成立を排除せずに、論理的には P の成立の余地がある表現形式を用いて不成立を伝えようとする場合などがあげられる。17)の例文は、大雪の中故障で立ち往生している汽車で、寒さに震えていららしている大佐に「代わりの汽車が六時より前に到着すること」の不成立を伝える発話である。

17) Colonel, répondit le conducteur, on a télégraphié à la station d'Ohama pour demander un train, mais il n'est pas probable qu'il arrive à Medicine-Bow avant six heures. (Verne, J., *Le Tour du Monde en 80 jours*)

P の不成立を完全には認めたくないことを発話者が表そうとする場合にも *probable* の否定が用いられることがある。18)では、「自分が8年間の任期を満了すること」が絶対に起こらないと断言したくない、事態の不成立は決められてしまったことではあるが認めたくないというニュアンスが <il n'est pas probable que> によってでている。

- 18) Prenant le contrepied de ce qu'avait affirmé Jacques Chirac,
M. Duisenberg a démenti s'être fixé une limite : «*Je n'ai jamais dit que je ne resterais que quatre ou cinq ans*, a-t-il déclaré devant la commission économique et monétaire du Parlement européen. *J'ai dit qu'il n'était pas probable que je reste pendant huit ans*»
(Le Monde : 9 mai 1998)

3. 結論

本稿では、否定が *le probable* におよんでいる *ne pas être probable* があまり用いられない理由を考察し、また、いくつかの用例から同表現の容認度が上がる状況を探った。

probable を否定するときは他の否定文同様、否定がおよぶ語句の概念が意識にのぼる。発話者は一度、中程度に高い蓋然性 *le probable* を意識し、規準とする。そして P がその規準を満たさないとして *probable* を打ち消す。ところが、*probable* は -P の成立を排除しない。そしてその否定は P の成立を排除しない。このように「-P の成立の non exclusion」を「P の成立の non exclusion」に訂正することは、情報としてあまり意味がない。否定文は基本的に情報を訂正するために用いられるのだが、*probable* を否定しても情報の訂正力に欠ける。これが *probable* の否定の使用頻度が低い主な原因であると考えられる。しかし、特別な理由があれば発話者は訂正力に欠ける *probable* の否定を用いる。その特別な理由とは、発話者が相手に対する反論の色を薄めるために訂正力を減らしたいと思うときや、はっきりと P の成立の排除というかたちで相手に P の不成立を述べたくないときや、P の成立の排

除を認めたくないときなどである。今回は<P- être probable> 全体に否定がおよんでいる *probable* の否定を扱うことができなかったが、いずれまた稿を改めて論じることにはしたい。

注

¹ 2章でもふれるが、<il n'est pas probable que P> には le probable を打ち消すものと、<P est probable> を打ち消すものがある。また、<il n'est pas probable que P> のほかにも一部 <ce n'est pas probable> の用例も取り扱う。

² pp.129-135 参照。

³ Norme については Kleiber(1976)参照。

⁴ 否定文を descriptive (non polémique) / polémique に分ける考え方があるが、いずれの場合も打ち消される概念を発話者は意識している。Polémique の場合にはその概念を発話者が相手の univers de croyance に想定している。

⁵ polémique の解釈のできない否定文はないが、descriptive の解釈のできない否定文があることなどが根拠になっている。négation descriptive は négation polémique から派生したもので、第一の発話がないものであると記述している。(Nølle :1993 :222-223)

⁶ improbable の使用頻度が probable の否定と対照的に使用頻度が高いのは、improbable は情報の訂正(le probable → le non probable)をしていないためと考えられる。

⁷ インフォーマントの一人は nous sortons rarement を nous ne sortons jamais にすると <cela n'est pas probable> が <cela est impossible> になると答えた。

参考文献

- Attal Pierre (1994) *Questions de sémantique -une approche comportementaliste du langage-*, Bibliothèque de l'Information grammaticale 27, Editions Peeters, Paris.
- Forest Robert (1992) « L'interprétation des énoncés négatives », *Langue Française*, no.94, mai, -les négations-, Larousse, Paris.
- Guimier Claude(1996) *Les adverbess français : le cas des adverbess en -ment* Ophrys, Paris.
- Kleiber George(1976) « Adjectifs antonymes : Comparaison implicite et comparaison explicite », *Traveaux de linguistique et de littérature*, no.14, pp.227-326.
- Martin Robert(1983) *Pour une logique du sens*, Presse Universitaire de France.
- Muller Claude(1992) « La négation comme jugement », *Langue Française*, no.94, mai, -les négations -, Larousse, Paris.
- Rivara René(1993) « Adjectifs et structures sémantiques scalaires » ,. *L'information grammaticale*, no.58, juin.
- 曾我祐典 (1993) 「*penser* と接続法節・直說法節」, 『ふらんばー』 20, 東京外国語大学フランス語学科, pp.1-14.
- (1997) 「フランス語の *possible*, *probable*, *certain* の意味と構文」 『人文論究』, 第47巻, 第1号, 関西学院大学, pp.138-149.
- 藤巻香代 (1998) «Il n'est pas probable que P -la négation de *probable*-, 関西学院大学文学研究科提出修士論文.

(博士課程前期課程)